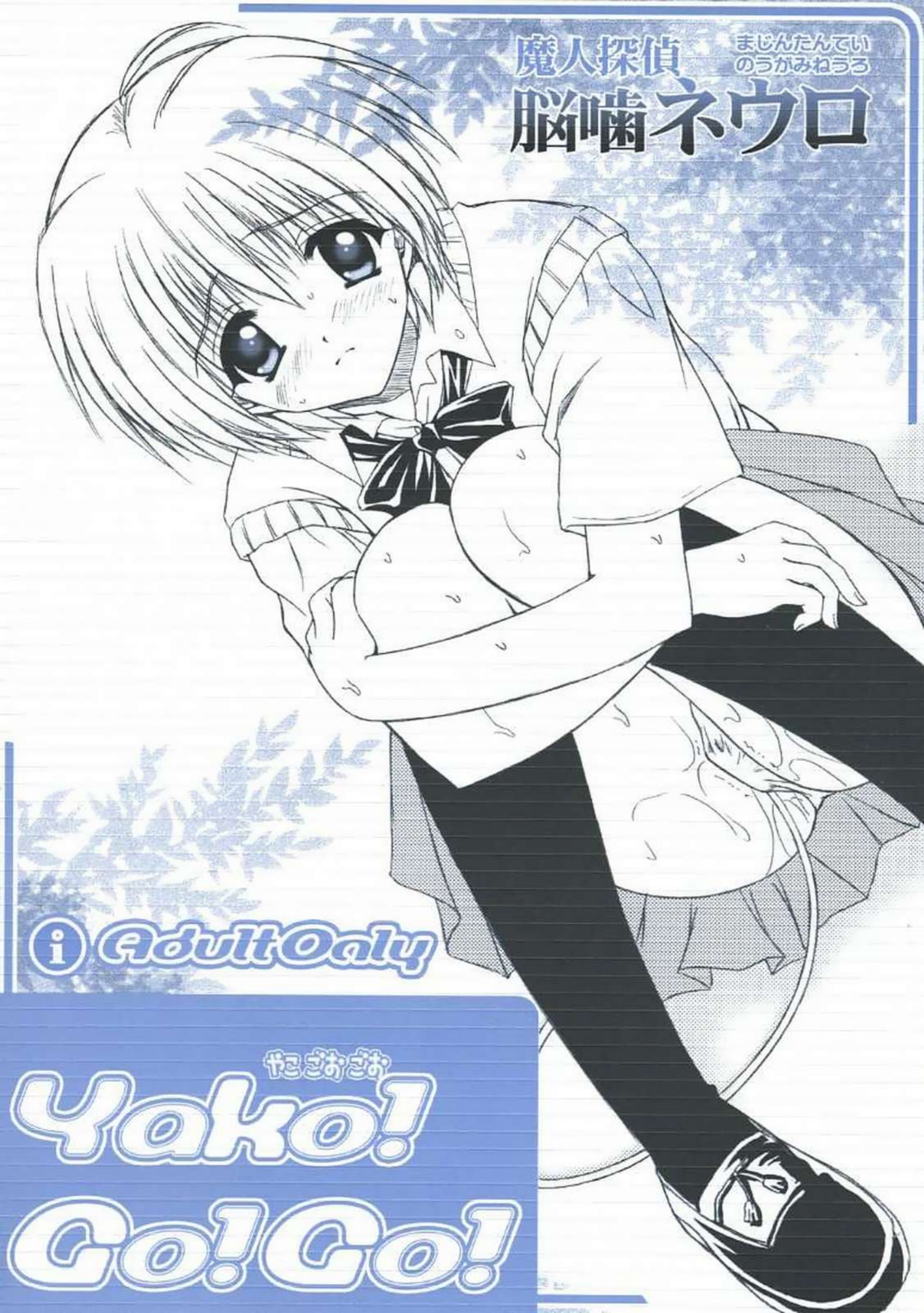
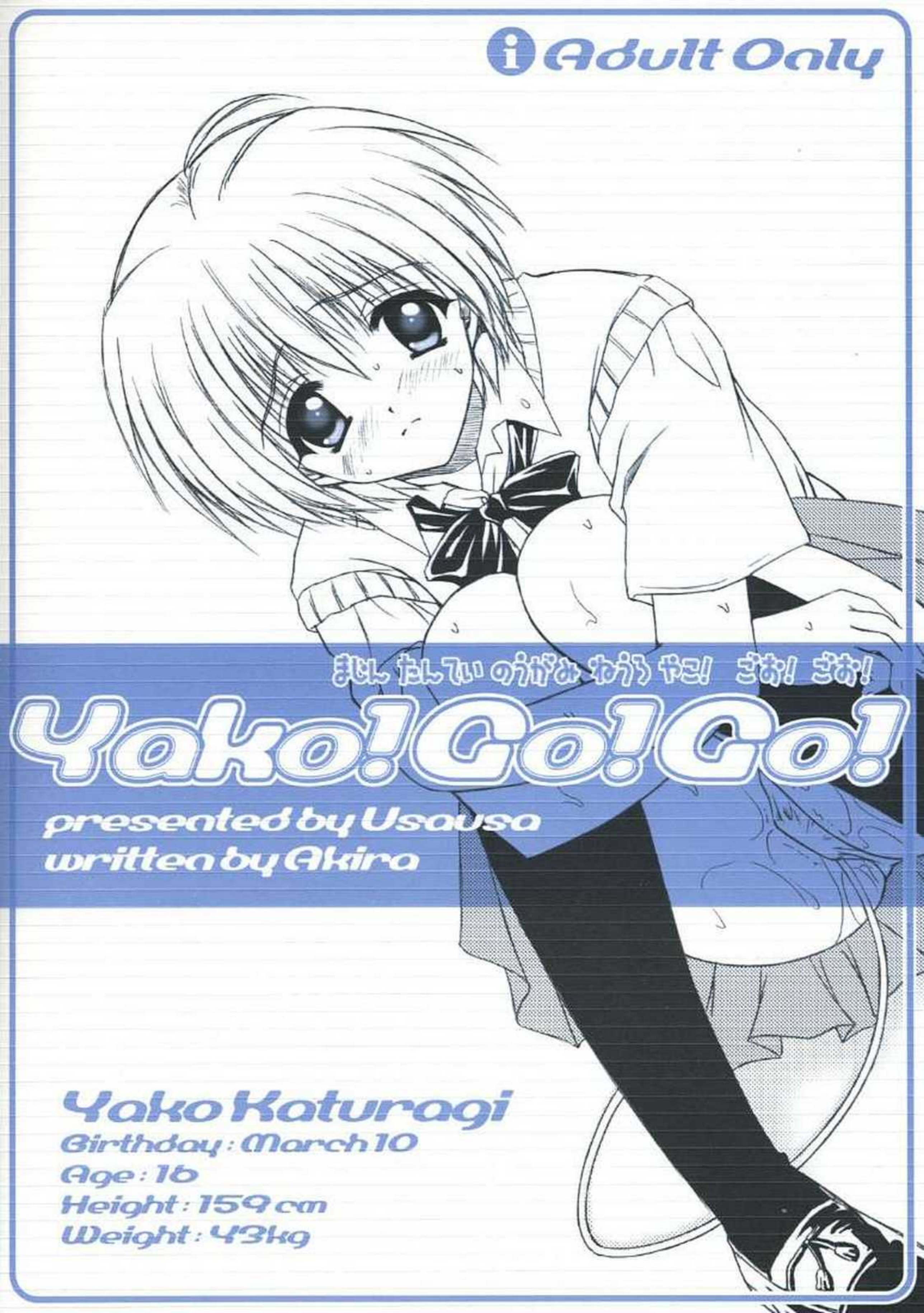
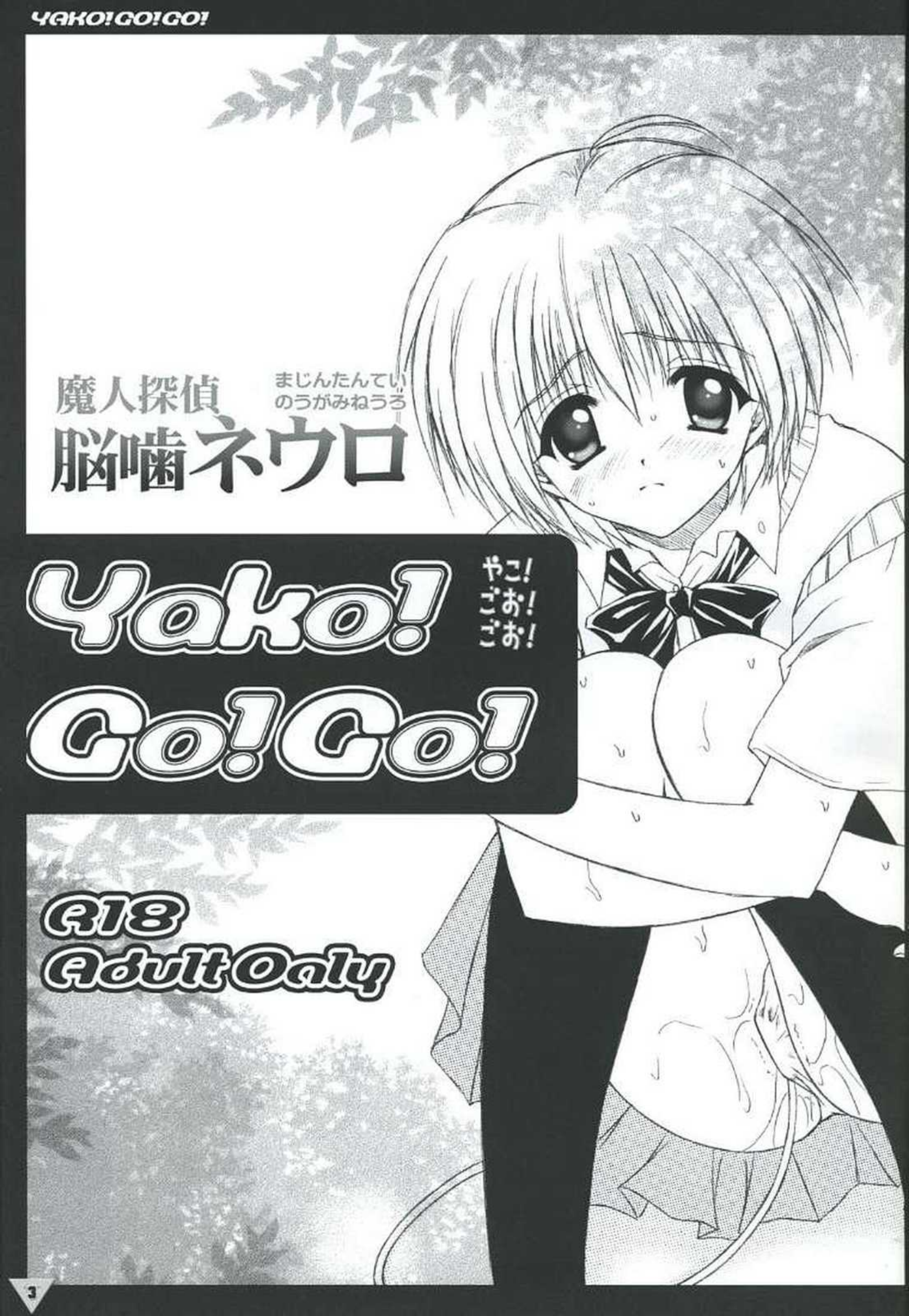
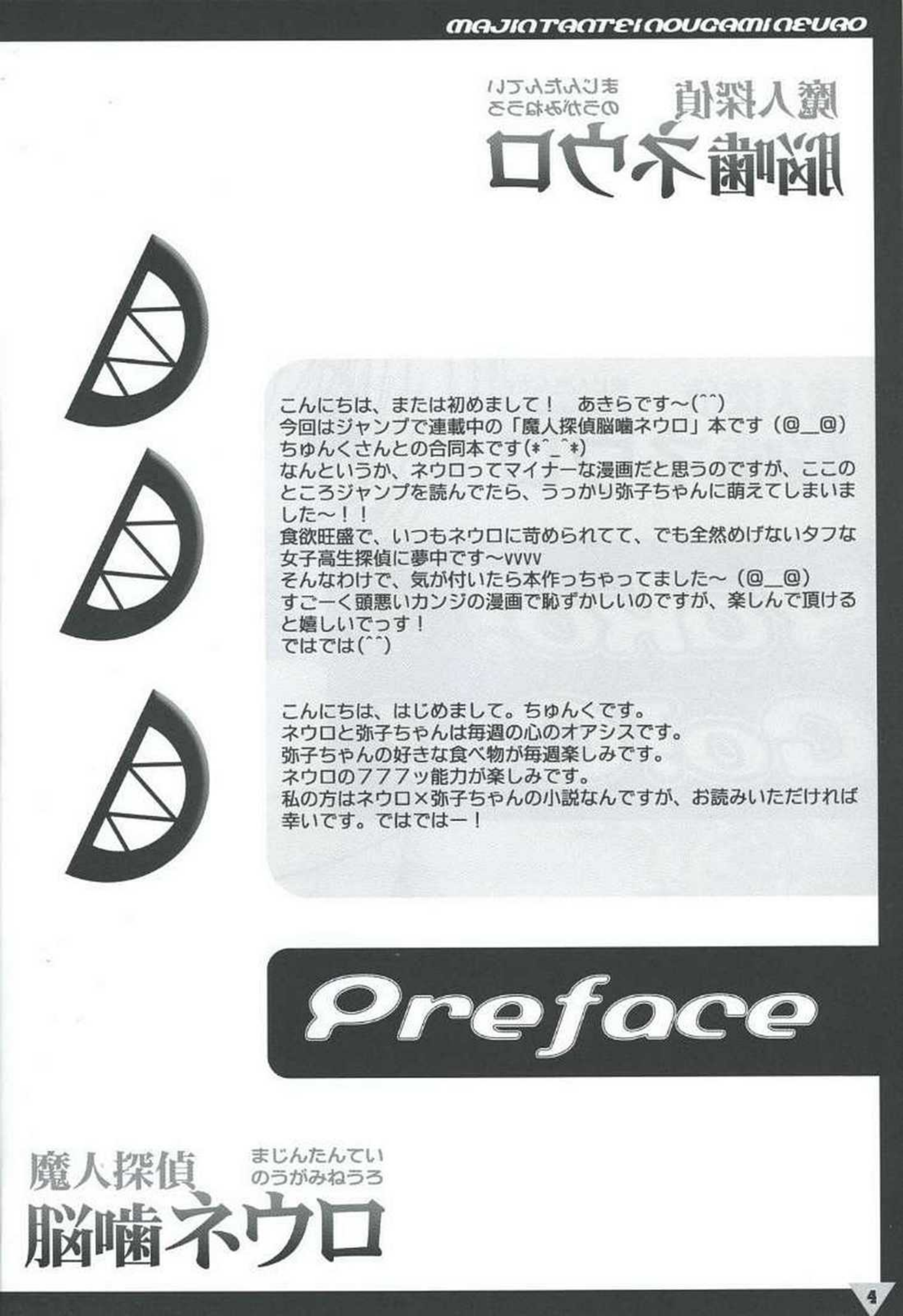

魔人探偵
まじんたんてい
のうがみねうろ
脳噛ネウロ
Adult Only
やこおごお
Yako!
Go!Go!


Adult Only
まじん たんていの うがみ かつらぎ やこ! ごお! ごお!
Yako!Go!Go!
presented by Usausa
written by Akira
Yako Katuragi
Birthday : March 10
Age : 16
Height : 159 cm
Weight : 43kg


魔人探偵
まじんたんてい
のうがみねうろ
脳噛ネウロ
Yako!
やこ!
ごお!
ごお!
Go!Go!
R18
Adult Only


魔人探偵
まじんたんてい
のうがみねうろ
脳噛ネウロ
Preface
こんにちは、または初めまして！　あきらです～(^^)
今回はジャンプで連載中の「魔人探偵脳噛ネウロ」本です（@_@）
ちゅんくさんとの合同本です(*^_^*)
なんというか、ネウロってマイナーな漫画だと思うのですが、ここのところジャンプを読んでたら、うっかり弥子ちゃんに萌えてしまいました～！！
食欲旺盛で、いつもネウロに苛められてて、でも全然めげないタフな女子高生探偵に夢中です～vvvv
そんなわけで、気が付いたら本作っちゃってました～（@_@）
すごーく頭悪いカンジの漫画で恥ずかしいのですが、楽しんで頂けると嬉しいでっす！
ではでは(^^)
こんにちは、はじめまして。ちゅんくです。
ネウロと弥子ちゃんは毎週の心のオアシスです。
弥子ちゃんの好きな食べ物が毎週楽しみです。
ネウロの777ッ能力が楽しみです。
私の方はネウロ×弥子ちゃんの小説なんですが、お読みいただければ幸いです。ではでは～！
魔人探偵
まじんたんてい
のうがみねうろ
脳噛ネウロ

んっ…
くちゅ
くちゅ
んふぅ…♡
くちゅ
ぬぷっ
はぁはぁ…
アソコが気持ち
いいよぅ…っ♡
ふむ
食べながら自慰をするとは
ヤコは変わっているな
ぬっ
ちょっ…!?
んぐっ…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぐ…
んふぅ…♡
それにこのスパゲッティ…♡
おっ…おいしいっ♡

うっ…
嘘!?

なんでネウロが
ここにいるのよッ?

まあ
そう怒るな

…って!

ビシッ

きゃ――ッ

なんだ
怒っているのか?

当たり前だよ!
勝手に私の部屋に
入るなーッ!

はぐ
はぐ

とか言いつつ
食うのも自慰も
やめないのだな

はぐ
くちゃ
くちゃ
くちゃ

余計なお世話!!

だって気持ちいいし…

ビカー

しゅる

ミュルルル
ルルル…

ぐいっ

ぐいっ

ぐいっ

ぐいっ

ぐぐっ

ぐぐっ

ふむ ずいぶんと
濡れているのだな
興味深い

ひゃっ
ひゃん……！

ぴちゃっ

ぴちゃっ

だらーぁ…

うん？
どうしたのだ？
ますます溢れて
きたようだが

うう～～っ
やめて

見ない
でぇ…

とか言いつつ
あいかわらず
食うのはやめないのだな

はむ…

だ だってェ…

ふむ

ぷるぷる…

では食欲と性欲
どちらが上か
試してみよう

ぷるんっ

ぐちゃッ

ぺろん

ぢゅるっ

とまんないんだよぅ

今食べるのをやめるのは
スパゲッティに対して
失礼な気がしてぇ〜〜!

ひんッ!

ぢゅるるる

ヒク‥

も…やっ…

ヒク

ヒクヒク!

らめらめらめらめらめらめらめらめっ

ずぶっ

ずぶっ

ずぶっ

ずぶっ

なるほど

ふむ ふむ

性欲が上か

完!!

魔人探偵 桂木弥子の事件簿 アイスの食し方編
アッ…
あいす…ッ
はあ
はあ
はあ
アイス食べるの
やめられないよう…
上の口も 下の口も
おなかぺこぺこだよォ…ッ
アイスに対して
キスしたい666
じょうしきはずれな
なかまたち
魔人探偵
脳噛ネウロ

TO LICK YOUR BOOTS!

『ずいぶんと淫乱なのだな。男を受け入れるのは初めてだというのに、こんなにもだらだらと汁を出しながらよがり狂っているではないか』
『うそっ……。私、どうしたの？　この男は魔人なのに……。ああっ、こんなおっきいのぶち込まれて、どんどんイヤらしくなっちゃう！』
『ほら、もっと雌犬の分泌液を出しながら、イキ狂うがいい。この世の人間では決して味わえぬ快楽を与えてやろう』
『ああっ！　いいっ！　気持ちいいっ！　オマンコの中が擦れてるぅ!!　いいっ！　もっと突いてぇっ！　おちんぽ、ごりごりしていいっ！』

「すっごい……」
桂木弥子はごくんと唾を飲み込んだ。彼女がいるのは、とある雑居ビルの一部屋だった。
この部屋は、つい先日までは「早乙女金融」という会社のものだったのだが、それを「平和的」に譲り受け、桂木弥子事務所として使えるようになった。もちろん、それは弥子の助手という立場を一応とっている人物の差し金だった。弥子自身は、探偵になりたいなんてこれっぽっちも思っていなかった。面倒なことには関わり合いになりたくない。そりゃ、女探偵とか、探偵事務所っていうのも、ちょっとはカッコイイとは思ったけどさ……。
だが、想像と現実は異なった。
ここ一週間ばかり、弥子のすることと言えば、部屋の掃除だった。
前はろくに掃除もしていなかったらしく、部屋の壁は、煙草のヤニとほこりのせいで、茶色く染まっていた。掃除機はかけたし、いらないゴミも全部捨てた。べたべたした壁やリノリウムの床も水拭きして、ようやく見られるようになってきた。そんなわけで、本棚の整理に取りかかっていたのだが。
「こんなえっちな本を、置いておかないでよね……」

弥子が、ぴらりと摘み上げたのは、いわゆる18禁のエロ漫画というやつだった。表紙には卑猥な格好の少女が、汁だらけになって、身体を淫猥にくねらせている。他にも、何冊か本棚の奥にしまってあった。前の社員のうちの誰かが読んでいたのだろうか。
「気持ちわるいなぁ……」
そういいながらも、弥子は続きが気になって、ぺらぺらとページをめくりはじめた。
「うっわ……。すごいよ、コレ……」
顔を赤くしながら、つい先を読みふけってしまう。
マンガの中では、女性の身体の中に、巨大な物体が入り込んでいくシーンが描かれていた。怒張した男性器はてらてらと黒光りして光っている。たぶん、誇張されて大きく描かれているのだろうが、血管の浮き出るところまで細かく描かれていて、やけにリアルだ。
挿入されている女の子は、頬を紅潮させ、愛液をだらだらとこぼし、弥子が一度も耳にしたことのないような、淫らな言葉を口走っている。頭の中で、いやらしい単語を読み上げるだけで、心臓がどきどきして、身体がカッと熱くなるような気がした。
だって弥子が知っている性的なことといったら、保健体育の授業で習った程度のことぐらいだったのだ。別にものすごい潔癖性でもないし、えっちに興味がないわけでもない。けれど、学校帰りの買い食いにお小遣いのほとんどを費やしてる身では、女の子向けのそういうちょっとえっちな雑誌やマンガを買うこともなかった。
それに、彼氏もいないし。当分、できそうにもないし。
高校生になったら、バイトしてお金を稼いで、素敵な彼氏といっしょにおいしいものを食べに行けたらいいなぁとか、思ってたのになぁ。弥子はちいさくため息をついた。
「こんなところで掃除しながら、えっちな本眺めてるなんて……。それもこれも、全部あいつのせいじゃないの」
「あいつというのは、我が輩のことかな」
「ぎゃーーー!!」

突然、弥子の目の前に現れたのは、ネウロだった。脳唯（のうがみ）ネウロ。魔界の住人。魔界の謎を食らいつくして人間界にやってきた化け物。名前が本当かどうかも弥子は知らない。そもそも魔界なんてものが存在すること自体まだよく信じられないのだ。弥子にわかることは、ネウロと名乗る何者かが、人間ではないこと。それが謎を喰らうことを求めていること。それだけだった。
「ずいぶんと大きな声を出す。まるで縊り殺される前の豚のようだな」
「足音もさせずにいきなり目の前に現れて、妙なこと言わないでよ！」

「それよりも訊ねる、お前は掃除をしながら、発情するのが趣味なのか？」
発情、という言葉に弥子は耳を赤くした。
「どうして、私がこんなところで発情しなきゃなんないのよ！」
「ふむ、その本か」
わめく弥子を気にも留めず、ネウロは本を手に取った。黒い手袋をつけた指が、パラパラっと紙をさばくようにページをめくる。
「読み終わったぞ。さてヤコ。お前は、こういう風に犯されたいと思っているのか」
パタンと本を閉じて、ネウロは弥子を見つめた。
「じょ、冗談じゃないわよ！」
「しかしお前の下着は、交尾のための分泌液――いや、愛液と言うのだったな。それでぐっしょりと濡れているではないか」
「う、嘘ッ！」
弥子は、制服のスカートのすそをぎゅっと引っ張った。たしかに、マンガを読んでいたときに興奮したせいで、股間の間が、じっとりしている。でも、ぐっしょり濡れているってほどじゃないし、それに大体どうやって、私の下着のことわかるのよ！
「我が輩に、それぐらいのことがわからないわけがないだろう。まったく貴様の脳みそは、蚤同然だな」
そう言うとネウロは、ごく自然に弥子の腰を抱き、くちびるを押しつけた。
「！！！！！」
弥子は、声にならない悲鳴をあげた。なんで！　なんでいきなりキス！　しかもファーストキス！　私の生まれて初めてのキスが～～～！！
押しつけているだけではつまらないとでも思ったのか、ネウロの舌が、弥子のくちびるをなぞる。目をまん丸くして、ばたばたと暴れようとする弥子を、ネウロはぎゅっと抱きしめた。この様子だけ見れば恋人のようだ。
けど――冷たい。
ぬらりとした触感は、弥子がこれまで一度も知らなかったものだった。人間とは違う温度のネウロの舌が、弥子の口腔を犯していく。白い歯をくすぐり、ピンク色の口蓋を擦りあげられる。ネウロの舌の動きは巧みだった。くすぐったさと、それ以外の――はじめて味わう奇妙な感覚に弥子は震えた。
「んっ…んんっ……」
ちゅうちゅうと、弥子は魔人が送り込んでくる唾液を飲み込んだ。汚いという意識はなかった。ただ乳飲み子が母親の胸にしゃぶりつくように、ネウロの舌に吸い付いた。魔人の唾液を飲み込むと、まるで酒を飲んだように、かっと焼けつくような感覚を覚えた。弥子は、しだいに夢中になって、ネウロの口腔をむさぼった。

逆転した立場をネウロは興味深げに見ている。弥子は目を閉じたまま、まるで愛しい男に熱烈なキスをするように、接吻をつづけた。
「はぁ……っ。はぁ…はぁ……」
魔人の唇が離れると、弥子は荒い息をついた。
「ふむ、人間は、このぐらいの年齢で発情しはじめると言うが、本当のことだったな。ヤコ、今のお前からは発情しきった雌犬よりも酷い匂いがぷんぷんとしているぞ」
「う、うそ言わないで……」
「嘘？　シラミに嘘をつく必要がどこにある？」
背中に回されたネウロの指が、白いブラウス越しに、弥子の身体をなぞった。つつっ……と指が動く感触に、弥子は身体が熱くなるのを感じた。ブラの中で、弥子の乳首が硬く熱くとがる。
おかしい、胸なんて、一度もさわられてないのに……。
そう意識してしまったせいか、さらに乳首が硬くしこる。身体を揺らすたびに、ブラジャーに乳首が擦りつけられるが、その微かな刺激が、さらに弥子の劣情をさそった。
「お前の貧弱な乳首も硬くなっているようだが、パンツの中の陰核も硬くなっているようだな」
「ち、ちが……」
弥子は弱々しく否定した。まずい…。こんなことしてたら、私、おかしくなる……。
ネウロの言うとおり、パンツの中は、すでにぐっしょりだ。クロッチだけではなく、パンツ全体が水にでも濡れたかのようにびっしょりと湿っている。こんなにあそこから、いやらしい液体が出るなんて思わなかった。
乳首がこりこりして、どうしようもない。胸を自分で、もみしだいてしまいたかった。あそこも充血しているのが自分でもわかる。スカートの中に手をいれて、思いっきり弄ってしまいたい。
けど、けど、私まだ処女なのに……！
とまどう弥子を見て、ネウロが笑った。
「さきほどのマンガに出てきたようにしたいのだろう？　お前のずぶ濡れのオマンコとやらに、硬くて大きなペニスをずぼずぼと突っ込んでほしいとねだってみろ、ヤコ」
「そんなわけ……」
「言ってみたいのだろう？　先ほどは、うれしそうな顔をしながらマンガを読んでいたではないか」
「だ、だれが……」
それだけは出来ない。初めての行為ぐらい、好きなひととしたい。さっきの

キスはノーカウントだ。背が高くてかっこよくてハンサムで料理が上手で、君と一緒にいると食事がたのしく進むなぁなんて素敵なひとと、海の見えるホテルで、幸せな初えっちをしたいんだから！

ネウロは、困った顔をした。

「いつもながら、お前の考えていることは、実につまらんな」

「ひとの考えを勝手に読むな――！！　この化け物――！」

「別にお前の考えを読みたいわけではないのだが、我が輩としても貴様の健康に気を遣ってやらなければならないしな」

「なにそれ！　話の脈絡がないよ！」

「つまりだ。お前が発情していたら、それを宥めてやるぐらいはしてやってもいいと言うことだ、ヤコ」

ネウロの指先が、弥子の下着の上をなぞる。手袋につつまれた異形の指は、硬質な堅さをもっていた。先端がごりごりとのこぎりのような形をしているのが、薄い手袋の皮ごしにもわかる。指先の突起が、濡れた布地の上から、つっと触れた。それだけで、陰核をすでに硬くしこらせていた弥子は達しそうになった。

「あ、あぅうっ！」

「道具も、薬も何も使っていないというのに、こんなことでイキそうになるのか？　まったくお前は淫乱なヤツだな、ヤコ」

ちがう――と否定したくても、現状がそれを示している。私、どうしちゃったんだろう。こんな事務所の中で、ネウロみたいなヤツにさわられて、キスまでして、それなのに乳首もあそこも体中ジンジンして、もっとしたいってねだってる。あんなマンガを読んだせいだよ。そうじゃなきゃ、こんなこと……。

「貴様には、雑巾程度の価値しかないが……よかろう。我が輩の肉奴隷にしてやろう」

熱に浮かされたような瞳をしている弥子に向かって、ネウロがそう言った。

「きゃっ！」

弥子の身体は、スチール机の上に乗せられた。高校の制服は着たままだったが、スカートはめくれあがり、白いふとももがむき出しになっている。ネウロは腕を組み、弥子を見下ろしている。まるでこれから実験を始める学者か、いたずらを始める子供のように、楽しげな表情だ。

「さて、自分から足をひろげて誘ってもらうとしようか」

「できるわけないでしょ、そんなこと！」

いくら身体がじんじんと火照っていても、できることと出来ないことがある。感じているのは、マンガのせいだし、ネウロにさわられたせいだ。自分のせいじゃない。自分から、あそこを見せて、イヤラシイポーズをとって、入れてくださいってねだるなんて……。

「……」

弥子は顔を赤くした。

「やはりお前は淫奔な人間だな。ひとりで想像して、興奮しているとは」

「な、何言ってるのよ！」

「そんなに淫乱だというのに、足を開き、陰部をみせて、犯してくださいと頬むことが、自分ではできぬというのか？」

「馬鹿！　馬鹿！　ネウロのバカッ！」

「我が輩の手を使って犯してほしいのか。まったく手間のかかる雑巾だな」

ネウロはわざとらしくため息をつくと、弥子の足首に手をかけた。弥子はひくりと震えた。左手で無造作に、弥子の片足をもちあげて肩に担いだ。右手の手袋を、口にくわえて引き抜く。異形の形をした指先が、露わになる。

「ひっ！」

弥子はちいさく悲鳴をあげた。その表情を見て、ネウロは笑った。

「安心しろ。殺すつもりはない」

「そ、そ、そう言われても……」

カブトムシやクワガタのような甲虫の足か、エビやカニのような甲殻類の足を連想させるネウロの指先が、恐くないわけはない。弥子は怯えた。ネウロはその様子をみても躊躇せず、人外の指先を、彼女の股間に向けた。

「動くなよ」

ぷつん。

布地が切れる音がした。どういう仕掛けか、魔人の指先は刃物と化したようだった。ネウロは指先を布地に突き立てて、穴を開けた。ちょうど、弥子の肛門の上だ。

弥子は息を飲んだ。

じりっ……。じっ……。じじっ……。

ネウロの指先が、弥子の愛液に濡れた下着を上に切り裂いていく。

弥子は体をこわばらせたて、ぴくりとも動かない。ネウロの指がゆっくりと、すべっていく。会陰を通り、膣口を通り、ぴったり閉じた大陰唇の間を通り、そして硬質な指先が、弥子のクリトリスに達した。

そのままネウロの指は止まった。

「ネウロ」

弥子は泣きそうな顔で、ネウロを見つめた。切られた下着の隙間からは、透明な汁がねっとりと溢れている。ネウロは円を描くように指を動かして、切れ目を大きく広げた。掃除したばかりの明るい蛍光灯のひかりの下で、赤く肥大

した弥子の陰核がヒクヒクと震えている。
「ヒクヒクと蠢いて、まるで魔界に咲く食虫植物のようだな。このぴらぴらとした肉色の花弁が、なかなかに、かわいらしいではないか」
ネウロは、指をそっと動かした。弥子の身体が小刻みに震える。ネウロの指のうごきは、ゆっくりとしたもので、欲情している弥子には物足りなかった。もっと動かしてほしい。その尖った指先でつまんで、こねて、マンガみたいにいやらしいことを言って欲しい。
「こちらの口も、お前の上の口と同様に、貪欲そうだな。ぱくぱくと激しく震えて、はやく食わせてくれ、ペニスを突き刺してくれとうるさそうに喋っているではないか」
「そ、そんなの……」
どうしよう、気持ちいい。そんな厭らしいことを言われてるのに、感じている。もっと卑猥なことを言って欲しい。もっとえっちなことをしてほしい。あぁ、私はどうしてしまったんだろう。頭が厭らしいことでいっぱいになってる。こんなゆるゆるした指の動きじゃたりないよぉ。もう、どうにかなりそう……。
「ネウロ……」
「どうした？」
「わ、私……」
続きが言えない。もっとひどいことをして。もっと気持ちいいことをして。その魔人の指で触って。私のあそこを広げて。見て。舌でなぶって。あそこにずぶずぶ突っ込んで。
いやらしい言葉が弥子の脳裏に浮かぶ。それでも、さすがに口に出してねだることは、できそうにない。
そんな弥子の様子を、ネウロはあざ笑った。
「やれやれ。お前の食欲と同様に、性欲にも素直になればよいものを。手間を取らせる」
ネウロの猛禽類のように尖った爪先が、弥子の赤い突起に触れる。
「あっ!!!」
「ここを弄って欲しいのだろう？　もっと厭らしいことをして欲しいのだろう？　自分でもイヤラシイ言葉を言いたいのだろう？　我が輩の指を突っ込んでほしいと」
「ち、ちが……」
「ああ、そうだな。お前は指では物足りぬな。我が輩の、魔人の男根をずぼずぼと、突っ込んで欲しいのだろう？」
「ヒッ！」
ネウロの指が、クリトリスを刺激する。針でさされたような痛みと、それを上回る快感が弥子を襲った。もっと激しい快楽をもとめて、自然に腰がうごく。ぬちゅっ、くちゅくっと、濡れた音が聞こえる。
「いやらしい音だ」
「あっ！　あっ！　いいっ！　気持ちいいっ!!　ネウロの指、気持ちいいよぉっ！　ギザギザいいっ！　気持ちいいっ!!」
理性よりも、欲望が打ち勝った。弥子は懸命に腰をくねらせて、ネウロの指をねだった。
「まったく、ぐちゅぐちゅにヨダレを垂らして。本当に意地汚いなお前は」
ネウロは、弥子をあざ笑いながら、濡れたクリトリスをきつくつまんだ。
「ああっ!!」
弥子は背中をのけぞらせて跳ねた。ネウロの指先は、人間ではできないような微細な動きで、弥子の貪欲に勃起した陰核を刺激する。
「やっ！　やあっ！　だって、だって、気持ちいいっ！　いいんだもの！」
こっそりと自分の部屋のベッドの中で、自慰をするよりも、百万倍気持ちよかった。ネウロの指で擦りあげられただけで、頭の中にスパークが散る。身体の奥から、熱いものがどくどくとあふれ出しているのがわかった。もっと。もっと気持ちよくなりたい。もっと欲しい。お願いだから。
「ネ、ネウロ……」
「わかっている。欲しいのだろう？　ここに」
ネウロの指が、弥子の膣口に触れた。
「あぁあっ!!!」
「ここに、美味いものを食わせて貰いたいのだろう？」
「あ…っああっ……!!」
「正直に言え。我が輩は素直なヤコが好きだぞ。もっとも嘘をつくというのなら、二度とここに何もつっこめないように、きちんと縫い合わせてやってもいいのだがな」
「や、やだ！　やだぁ！」
「出来ないとでもおもうのか？　我が輩の魔界777ッ能力（どうぐ）のひとつを使えば……」
「お、おもわない…だから……だから…」
「指を入れてほしいのだろう？」
「う……うん」
「ねだってみろ」
弥子は、目を閉じた。
「い……入れ…て」
マンガで見た台詞が脳裏に浮かぶ。
「ネウロの指、私のオマンコの中にいれて、ぐちょぐちょにかき回してぇっ！」
言ってはならない言葉を口にしてしまった。とてつもない背徳感があった。

弥子には、もう自分の欲望を止めることはできなかった。
ず、ずぶぶぶ……。
「あ……ああ……っ!!」
ネウロは弥子の膣の中に、指を一本挿入した。爪の先から、第一関節、指の根元まで、ずっぷりと入っていく。弥子はたまらず呻いた。
「ひっ……くっ……あんっ…」
「どうだ、弥子?」
魔人の指が、愛液で濡れそぼった内壁をこすりあげる。とてつもない快感が、弥子の胎内をかけめぐった。
「い、いいっ! いいっ! もっと、もっと、もっと擦って! ゴリゴリっって擦ってぇ!!! ネウロの指で擦ってよぉ!!」
「ずいぶんな、よがりようだな」
ネウロの指が、さらに増える。2本、3本と増えていく。異形の指は、弥子のきつい入り口をするりとすり抜け、膣内で蜘蛛が足を広げるようにかき回す。まだだれの手も触れたことのない処女地を魔人の指で犯されている。弥子はその快感に酔った。
「だって! ああっ! 気持ちいい! いいんだもん。あっ! あっ! ああっ!! もうだめっ! オマンコいいっ! 気持ちいいっ!」
「まだ処女だというのに、膣を弄られるのが好きとは……」
「あ…ああぁ……! クリトリス弄るのもよかったけど、オマンコの中擦られるの、すっごい気持ちいいよぉ! いいっ! どうにかなるぅっ!! 犯して。もっと犯してよぉ…!」
「ヤコは本当に貪欲な生き物だな。さすが我が輩の肉雑巾だ」
「あ、そ、そうっ! 私、わたし、ネウロの肉雑巾になるぅ!! なるからぁ…!」
弥子は奔流のような欲望をせき止められなかった。もっと、たべたい…。私の…わたしの下のお口で……もっと……もっと……気持ちよくて…いやらしいことがしたい……!!
「我が輩の、肉雑巾の望みはなんだ?」
「もっと、もっとしてぇ! オマンコにネウロのオチンチン、ずぼずぼいれてぇ! 私の口に、ネウロのおチンポたべさせてぇ! いっぱい、いっぱい犯してぇ!!」
「しかたがあるまい。では……」
ネウロは、自分の逸物をとりだした。魔界人のそれは、人間のものとは大きく様相が異なっていた。山羊のツノのように捻れ、その周囲にはでこぼことした突起がついている。突起のひとつひとつには繊毛がついており、微細な動きをしていた。そして、てらてらと濡れた光をみせるそれは、とてつもなく巨大だった。赤ん坊の腕ぐらいはある。弥子も、それを見たらさすがに血の気が引くだろう。しかし弥子からは、その剛直をみることはできなかった。
ネウロは、弥子の両足を大きく広げた。蜜口から、どろりと愛液が机の上にこぼれおちる。下敷きになっているスカートはすでに淫猥な液体で変色していた。
ネウロはぺろりと自分の唇を舐めた。
「ではヤコよ、我が輩の男根をとくと味わうがいい」
魔人の先端が、弥子の濡れそぼった処女穴に当てられた。
弥子は淫猥な期待と、はじめての恐怖に震えた。
ず、ずぶぶぶっ!!!
「あ、ぁあああああっ!!」
ネウロの剛直が弥子の赤いひくひくとした蜜壺に挿入されていく。処女の狭い肉壺はめりめりと裂け、きちぎちと広がっていく。あまりの激痛に弥子は目尻から涙をこぼした。
「い…たぁ……!!」
「すぐに良くなる」
「う、うそ……ひぁああっ!!」
ぎちゅっ! ぎちゅっ! ぎちゅっ!
ネウロは腰を推し進めた。弥子の秘所から、処女血があふれてくる。痛い。痛い。痛いのに。
「あっ! あっ! ああっ! いいっ! 痛いのに、いいっ! なんで! なんでぇっ!」
「魔人のモノが悪いわけがなかろう」
ネウロは声をあげて笑った。愉快そうだった。弥子の身体に、めりめりと巨大なペニスが潜り込んでいく。身体中が引きちぎられるように痛いのに、どこか気持ちよかった。自分が壊れそうなのに、それが心地よかった。魔人の巨根は大きいだけではなく、繊細だった。繊毛が肉壺の内壁をくすぐり、弥子のひきちぎられた処女膜を癒すように愛撫する。
ずぼっ! ずぼっ! ずぼっ!!
魔人の男根が弥子の胎内を、リズミカルに犯す。
そのうち魔人の男根が、めきょりと三つに枝分かれした。中央はふとく、残りのふたつは、触手のように細い。一方はさらに枝分かれし、弥子のクリトリスを刺激した。
「ひあああぁあぁあぁあんんっ!!!」
「お前は強欲だからな、弥子。肉壺を犯されるだけでは足りぬだろう?」
「いっ! いっ! いいっ! すご、いいっ! オマンコとクリトリス、両方いいよぉおおお!!」
「ふん。それだけではないぞ」

もうひとつの触手が、弥子の後ろの穴を刺激し始める。触手の先端には、舌に似た器官があった。その怪異な舌が、ぴちゅぴちゅと弥子のすぼまりを舐め始める。

「あぁぁあ!!! な、なにっ! なに、これぇえ!!」

「おまえのもう一つの口だ、ヤコ。お前の汚らしいケツ穴を弄ってやっているのだ。感謝しろ」

「あ、いっ! いいっ! うそっ! やだっ! お尻の穴いじられるの、いいよぉっ!!」

弥子にはもう自分が感じているのが苦痛なのか快楽なのかわからなかった。ただもっと犯されたい。それだけが脳裏をしめていた。弥子は自ら、うすい胸をもみし抱き、乳首をいじり、舌を突き出して、貪欲に腰をふり、ネウロの陰茎をぎゅっと締め付けた。

「そんなに締め上げて。欲しいのか、我が輩の精液が?」

弥子は必死に肯いた。

「ちょ、ちょうだい。わ、わたしに……私に、ネウロのせ、せいえき…ちょうだい!」

「どうしてほしい、ヤコ?」

ネウロの声は静かで、優しいとも言えるぐらいだった。

「絞りとるからぁっ! 精液っ! ネウロのおちんちんから、精液どばどばって……! いっぱい…いっぱい! 肉雑巾の弥子にしぼりとらせてぇ!!」

「よかろう」

ネウロの動きが速くなる。魔物のペニスが、弥子の肉壺と陰核と肛門のすべてを犯している。気が狂う。気持ちよすぎる。いいっ!!

汗と、愛液と、涙と、涎がこぼれる。弥子の体中が濡れていた。でも足りない。もっともっと、して。犯して。オチンチンで、精液で、私の中を、いっぱいにしてぇ!

「あっ、ひっ、おぅっ!あ、ああっ!あああぁ! もっとぉ! もっとぉ! 私の中まで! オマンコも、お尻の穴も、ぜんぶ、ぜんぶ犯してぇ! ネウロの精液、せいえき、のませてぇ! わたしに、もっと、食べさせてぇ!!!」

弥子の胎内で、ネウロの男根がびくりとふるえた。弥子は歓喜に打ち震えた。

「くるっ! きちゃぅ!!! ネウロの精液、くるぅぅぅぅぅ!!!!」

どくっ! どびゅっ! ぶびゅびゅうぅっ!! びゅるるるぅぅ!!! びゅるるるっっ!! びゅぶっぅぅぅ! ぼびゅぅぅぅ!

魔人から、大量の白濁液が放出された。人間では不可能な量のザーメンだった。どろどろとした液体は、ぶくぶくと泡立ちながら、弥子を汚した。

「ああ、もう! 制服、ぐしょぐしょだよ!」

弥子は、半べそをかきながら、汚れたスカートをタオルで懸命に拭いている。そのけろりとした表情を見ると、さっきまでの痴態がまるで嘘のようだ。

「魔人と性交すると、たいていはその快楽に耐えきれずに廃人になるのだがな」

この少女の貪欲さは、見上げたモノだ。

「何か言った、ネウロ?」

「いいや、別に」

まったく人間という生き物は面白いものだ。これだから、人間界の謎が美味なのかもしれんな。夕映えがさしこむ事務所の中で、ネウロはたのしそうに笑った。

魔人探偵
まじんたんてい
のうがみねうろ
脳噛ネウロ

最後まで読んでくださってありがとうございます、あきらです〜！
正直ネウロの本とかってどうなのかなぁ…と不安を隠しきれないのですが、
すっかり楽しんで描いちゃいました(^^)
もし機会があったら、今度はXとヤコとか、ネウロとヤコとXの3Pとか描
きたいでっすvv
とりあえず「まずヤコちゃんありき」で！(^^)(^^)
ではでは！ありがとうございました〜！！！
★サイトもよろしくです〜！　http://usausa.main.jp/

お読みいただきありがとうございます。ちゅんくです。
小説の方、ネウロらしさと、弥子ちゃんらしさが出てたでしょうか。ちょっ
と、がんばってみたんですが……。それにしても弥子ちゃんエロは面白かっ
たです。また書きたい……。ぜひ食事！を取り入れたいです。あと、X。ぜ
ひXを交えて書きたいです。でも基本は弥子ちゃんで！ それでは！

Postscript

Yako! Go!Go!

やこ!
ごお!
ごお!

Printing by Sunrise Publication
Works by Akira and Tyuaku
Published by Team Usausa
Issue Date: 2005/08/14
http://usausa.main.jp

Adult Only

魔人探偵
まじんたんてい
のうがみねうろ
脳噛ネウロ

無断転載・複写・複製・Webへの掲載を禁止いたします。

この本は成人向けです。１８歳未満の方の閲覧を禁止します。